

<b>Title</b>	「美女と野獣」にみる 18 世紀の読書観：ボーモン夫人の原作を通して
<b>Author(s)</b>	若松, 昭子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 第 26 巻第 2 号, 2014.3 : 173-188
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4852">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4852</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

## 「美女と野獣」にみる 18 世紀の読書観

——ポーモン夫人の原作を通して——

若 松 昭 子

### 抄 録

---

本研究では、ポーモン夫人の「美女と野獣」に描かれた読書の姿を通して、18 世紀フランスの読書観の輪郭を探った。その結果、以下の事柄が明らかになった。ポーモン夫人は子どもたちに向けて創った教訓的物語のなかに、単純だが強力な読書啓発のメッセージを込めた。「美女と野獣」はその代表例であった。一方、彼女は書物を自分の体面保持に利用する人々や、有害な読書習慣が身に付いた小説読者を風刺的に描いた。それらの表現の中に、読書の理想形を子どもたちに示そうとしたポーモン夫人の意図を読み取ることができた。それは、新しい教育を模索する同時代の人々の読書観を代弁し牽引したものと思われる。

---

キーワード；ポーモン夫人、美女と野獣、読書、読書観、子どもの雑誌

### 序 章

ディズニーのミュージカル映画などを通して人々に知られている〈美女と野獣<sup>(1)</sup>〉の物語は、18 世紀にポーモン夫人 (Jeanne-Marie Leprince de Beaumont, 1711-1780) が書いた同名の物語が原型である。「美女と野獣」(La Belle et la Bête) は、1756 年<sup>(2)</sup> に出版された『子どもの雑誌、あるいは分別ある家庭教師と最も優れた生徒たちとの会話』<sup>(3)</sup> (以下『子どもの雑誌』) のなかの一物語として収載された。しかしそれ以前の 1740 年、ヴィルヌーブ夫人 (Gabrielle-Suzanne de Villeneuve, 1685-1755) は、『アメリカの若い娘と海の物語』<sup>(4)</sup> のなかでもう一つの〈美女と野獣〉(以下「ヴィルヌーブ版」) を発表した。ポーモン夫人の「美女と野獣」はヴィルヌーブ版を参考にして書かれたと言われるが、ヴィルヌーブ版が現在では忘れ去られたような存在であるのに対し、ポーモン版はその後に創出される様々な派生形の原型として 250 年以上にわたり生き続けている。その理由の一つとして、ヴィルヌーブ版は話の筋が長くて複雑であるのに対し、ポーモン版は子ども<sup>(5)</sup> 向けの話として登場人物が整理され、簡潔で親しみやすい作品になった点があげられている<sup>(6)</sup>。

今日では、「美女と野獣」の物語は、劇、詩、小説、絵本、SF小説のほかに、音楽、オペラ、ダンス、映画、ラジオ・テレビ番組、さらにはゲームの分野にまで広がった。ハーンは、1984年のOCLC（Online Computer Library Center）の目録上で、〈美女と野獣〉という題を持つ出版物、映画、レコードは全部で257項目にのぼることを確認した<sup>(7)</sup>。因みに、2013年の国立国会図書館の目録上では485項目、うち図書は140項目あった<sup>(8)</sup>。〈美女と野獣〉についての研究も、児童文学、民俗学、深層心理学、教育学、社会学、歴史学、美学、芸術など、幅広い学問分野に広がっている。

メディア史を研究対象とする筆者が、ポーモン夫人の「美女と野獣」に関心を持ったのは、それが大衆読者層の登場する18世紀中葉に書かれた作品であったからだ。初めて物語に接した際の印象は、そこから伝わってくる強い読書啓発のメッセージであった。しかし、今日ではディズニー版映画にもその他多くの同名絵本にも、そのようなメッセージをほとんど読み取ることはできない。教育家であったポーモン夫人の『子どもの雑誌』が子どもたちの教育を目的として書かれたことはよく知られている。「美女と野獣」も教訓的要素に溢れている。今日の映画や絵本では、子どもの楽しみを優先させたいという立場から、教訓的な部分の多くが削られてしまったようだ。同じように、読書もほとんど姿を消してしまった。「美女と野獣」の物語が、時代とともに様々に変化を遂げていくなかで、それぞれの作品に込められるメッセージも変化するのは当然である。

しかし、それだからこそ、読書人口が増加し新たな読者層が形成されつつあったその時代に、「美女と野獣」が読書をどのように伝えていたかという点に興味をわく。この物語に描かれた読書の姿を通して、当時の読書事情の一端が見えてくるのではないかと思われるからである。そこで筆者は、〈美女と野獣〉に関するこれまでの様々な研究の視点とは離れ、ポーモン夫人の原作に表象される読書に考察の焦点を合わせようと思う。

本稿では、ポーモン夫人の「美女と野獣」に描かれた読書の姿を通して、18世紀フランスにおける読書観の輪郭を探りたい。

## 第1章 「美女と野獣」の背景

ポーモン夫人は、1711年にフランス西部の古都ルーアンで生まれ、1780年に南フランスの小村で没した<sup>(9)</sup>。最初の結婚が1745年に不幸に終わると、ポーモン夫人は渡英し貴族の家で家庭教師を務めるかたわら、1750年には『新フランス誌』<sup>(10)</sup>を発刊して名声を得た。以後、精力的な執筆活動によって、『子どもの雑誌』や、『若い女性の雑誌』<sup>(11)</sup>などを出版した。彼女の約70年の生涯で、70巻ほどが出版されたと言われるが、代表著作のうちの多くはイギリス滞在中に書かれている。ポーモン夫人は1757年前後に英国に住む同郷の男性と再婚し、1760年代初めにフランスに戻り、晩年はフランス南部のシャヴァノという小さな村に住んだ。

フランスの公教育制度はフランス革命後に整備され確立された。それ以前のフランスにおいて、

子どもたちの教育を担っていた中心は貴族では家庭教師、庶民では教会であった。18世紀のヨーロッパは、啓蒙主義の思想が新しい流れをつくりだした時代である。この時代の代表的な書物である『百科全書』は1751年に、ルソー（Jean Jacques Rousseau, 1712-1778）の『エミール』は1761年に刊行されている。ボーモン夫人が子どもたちに向けて創作を行った時期は、理性を中心にみる世界観のもとで、子どもに対する新しい見方や新しい教育が求められていた時期と言える。子ども向けの書物に対する需要の高まりとともに、教育的で道徳的な書物が次々と刊行されるようになる。その傾向は特にドイツで著しかった。アザールは、この時期は「児童文学史上、前例をみないほど美德が讃美され、子どもたちの頭上には教訓が雨と降り降りそそいだ。そのころの大人たちは、読書によって子どもたちを教化善導しようと躍起になっていた」<sup>(12)</sup>と述べ、こうした方向性に先鞭をつけたのがボーモン夫人であり、その後に出版される子ども向けの書物は、ボーモン夫人の模倣か後継であったと論じた。アザールの言葉を借りれば、『子どもの雑誌』はボーモン夫人が志向した「読書による教化善導」を具現化する手段として生み出されたものと言えよう。アザールは、教育的要素が重視されるあまり物語から娯楽性が後退してしまったと嘆きつつ、それでも「美女と野獣」という美しい物語を書いたことでボーモン夫人を大目に見よう、と記している<sup>(13)</sup>。

『子どもの雑誌』は、1756年にロンドンで出版されるや、瞬く間にフランスをはじめヨーロッパの各都市で刊行された。その数は、ボーモン夫人が没する1780年までに47版、さらに1887年まで期間を拡大すれば少なくとも130版を数えるという<sup>(14)</sup>。『子どもの雑誌』は、全編がボーモン夫人によって書かれた読み物から成っている。全体は27日に分けられ、毎回、女教師のところに貴族の娘たちがやってきて対話を行うという形で進行する。登場人物の名前も大変象徴的である。例えば、女教師の善良夫人（Mademoiselle Bonne）、12歳の常識嬢（Lady Sensée）、12歳の才媛嬢（Lady Spirituelle）、7歳の玩具嬢（Lady Babiole）、13歳の嵐嬢（Lady Tempête）などである。読者は、彼女たちの対話を通して、神話、聖書物語、歴史、生物、地理などの基礎的な知識とともに、倫理や美德の大切さを学ぶという工夫が凝らされている。そのなかに、13編のコント（conte）<sup>(15)</sup>が挿入されている。「美女と野獣」は、第5回の対話<sup>(16)</sup>のなかに挿入された、コントとしては2番目のものである。

「美女と野獣」は、心優しい主人公ベルが、野獣の醜い外見ではなく、内面の美しさに目を向けることで幸せな結末を迎え、反対に、意地悪な姉たちは罰を受けるという話である。教育的意図でつくられた勧善懲悪の物語であるが、特筆すべきは読書が物語を展開させる重要な鍵となっていることである。物語の所々に主人公は読書が好きな娘であることが描かれる。目には見えない真実を見抜く力は、読書によって培われるということを示唆しているのは明らかである。

次章において「美女と野獣」のなかの読書に関する記述を具体的に見ていこう<sup>(17)</sup>。

## 第2章 「美女と野獣」のなかの読書

商人には3人の息子と3人の娘がいた。末娘はベル(美しいという意味)と呼ばれるほど美しく、また気立てもよい。

姉さんたち二人は、とても高慢ちきで、いつも貴婦人気取りだったので、自分たちのお友達にも、身分のあるひとたちでなければ満足しませんでした。毎日毎日ダンスパーティーやお芝居や、散歩に出かけて、一日の大半をためになる本を読んで (à lire de bone livres) 過ごしている末の妹を馬鹿にしておりました<sup>(18)</sup>。

突然、商人は破産し、家族を連れて人里離れた田舎へ引っ越し、生活のため畑仕事もせざるを得なくなる。

ベルは朝の4時から起きだして、大急ぎで家じゅうの掃除をし、家族の食事をつくりました。仕事がすんでしまうと、ベルは読書をしたり、クラブサンを弾いたり、あるいはまた糸を紡ぎながら歌を歌ったりして過ごしました (elle lisait, elle jouait du clavecin, ou bien elle chantait en filant)。二人の姉さんたちは、あべこべに、退屈で死にそうでした<sup>(19)</sup>。

商人は、船を一隻取り戻すための旅に出る。姉たちは土産にドレスや装飾品をねだるが、ベルは一本のバラがほしいと言う。商人は帰路で道に迷い、森のなかの無人の城に泊る。翌日、ベルのためにバラを一本折ると、野獣が現れ償いとして命をもらうと言う。帰宅した父親に話を聞き、ベルは身代りに野獣の城に行くと言い張り、一緒に野獣の城へ行く。父親が帰されると、ベルは自分が殺される前にせめて美しい城を見学しようと思う。しかし、扉には「ベルの館」と書いてあり、びっくりする。

ベルは大急ぎでこの扉を開けました。そして、このお城の隅から隅まで心配りがされたすばらしい様子に目を奪われてしまいました。なかでもいちばんベルの目を惹いたのはりっぱな図書室<sup>(20)</sup>と、クラブサンと、何冊もの音楽の本でした (une grande bibliothèque, un clavecin, et plusieurs livres de musique)。「私を退屈させまいという心づかいなんだわ」とベルはつぶやきました。(中略)「もし私がたった一日しかここにいないとしたら、こんなにりっぱな支度をするわけがない。」こう考えるとベルの気持ちは元気づけられました。ベルが書棚を開けると、金文字でこんな言葉を書いた本が目につきました。「ご要望があればなんなりとお命じください、

あなたはここの女王さまでご主人さまです。」<sup>(21)</sup>

ベルは、次第に野獣の親切を嬉しく思い始め、姿の醜さは気にならなくなる。しかし、野獣からの結婚の申し出には応じる気になれない。ベルは、父親の病気を案じて家に帰るが、妹の幸福を妬む姉たちの策略で約束の日に戻れない。野獣は悲観して姿を消す。瀕死の野獣を見つけたベルが結婚を誓うと野獣は王子に変身し、二人は幸せに暮らす。姉たちは罰として石に変えられてしまう。

「美女と野獣」は、美德や勤勉を教える教育的な訓話であり、最後の仙女の言葉には本コントのテーマが集約されている。「あなたは見かけだけの美しさとか、頭のよさよりも、心の美しさを選びました。ですから、これらの長所をすべてかねそなえたりっぱな人にめぐり会えたのですよ。」<sup>(22)</sup>

しかし、本コントには、こうした教訓だけではなく、強い読書啓発のメッセージが盛り込まれている。ベルは、野獣の外見にとらわれず内面の美しさや優しさに気づくことができる娘、すなわち真実を見抜く心と眼を持った娘である。それは、ベルが「ためになる読書」をして過ごした結果である。ベルにとって読書は家事と同じように大切な日課の一つとなっている。美貌、財産、身分といった外面的なものにしか関心を示さない享樂的な二人の姉は、父の突然の破産とそれに伴う人里離れた田舎での暮らしを嘆くことしかできない。しかし、ベルは読書によってそれを楽しく充実した時間へと変えることができる。また、野獣の城に捕らわれたベルに癒しと楽しみを与えるのも読書である。ベルに献上されたりっぱな図書室で、彼女は初めて野獣への恐怖と警戒を解く一歩を踏み出すのである。要するに、ポーモン版「美女と野獣」では、幸せな結末へと向かう物語の展開において、読書は重要な鍵であり伏線となっている。

### 第3章 『子どもの雑誌』のなかの読書

『子どもの雑誌』に収載されているコントは、古くから人々に親しまれてきた物語や既に出版されている物語をもとに、子どもたちが面白く楽しめるような教訓的物語として書き改められた<sup>(23)</sup>。「美女と野獣」が後世まで大きな影響力を持っている一方で、『子どもの雑誌』に収録されたほかのコントについては、これまでほとんど取り上げられることはなかった。しかし、それらのコントを見てみると、読書啓発のメッセージは「美女と野獣」ばかりでなく、『子どもの雑誌』全体の底流となっていることがわかる。本章では、数編のコントのなかの記述からそのメッセージを取りだしてみたい。

#### 3.1 「二人の王子さま」 Fatal et Fortuné

本コントは、3番目のコントであり、第6対話（4日目）のなかで語られる。

王妃には二人の王子がいた。兄はファタール（不運の意味）、弟はフォルチュネ（幸運）といった。

森に捨てられた兄は狼に育てられ逞しくなって、弟王子の遊び相手として城に住むこととなる。わがままで意地悪な弟は、兄と知らずにファタールに辛く当たる。

フォルチュネには、字を書く勉強 (à lire) のために先生がつけられておりましたが、先生は絶対に王子を泣かせるようなことはまかりならぬ、と命令されておりました。前からそれを聞いていた若いプリンスは、本を手取るたびに、わざと泣いて見せるのでした (Le jeune prince, qui avait etnendu cela, pleurait toutes les fois qu'il prenait son livre)。こんな具合ですから、5年たっても王子は字を知りませんでしたが、反対にファタールのほうは完全に字を読むことができ、そればかりかすでに字も書けるくらいでした (Fatal lisant parfaitement, et savait déjà écrire)<sup>(24)</sup>。

二人は10年間一緒に過ごし、「その間にファタールは学問も心の優しさもすっかり身につけた (le Prince Fatal était un prodige de science et de douceur)」<sup>(25)</sup> しかし、弟王子の妬みからふたたび城を追い出される。やがて、ファタールは兵隊に入り、大地主で乱暴な隊長の部隊に配属される。

隊長は意地の悪い男で、ほかの兵隊を扱うのと同じようにファタールにもずいぶんつらく当りましたが、ファタールは隊長を尊敬する気持ちを捨てることができませんでした。(中略) この隊長は読書は苦手でしたが、でも自分を訪ねてくるひとたちに、自分がひとかどの教養ある男だと思わせたかったので、大きな図書室を持っておりました。ファタールは、兵隊としての自分の任務をおえると、仲間の兵士たちとお酒を飲んだり、バクチを打ったりする代わりに隊長の部屋に閉じこもって、偉人たちの伝記を読んで軍人としての仕事を一生懸命に学んだので、もうじゅうぶん軍隊を指揮できるようになりました (Ce capitaine n'aimait pas la lecture, mais il avait une grande bibliothèque, pour faire eroire à ceus qui venaient chez lui qu'il était un homme d'esprit. …… il s'enfermait dans la chambre du capitaine, et tâchait d'apprendre son métier en lisant la vie des grands hommes, et devint capable de commander une armée)<sup>(26)</sup>。

その後、ファタールは、様々な困難に立ち向かいながら最後には好きになった姫と一緒に幸せになる。卑怯で意地悪な弟王子は敵の兵隊に殺されてしまう。

『子どもの雑誌』のコントのなかで、読書する主人公の多くは少女たちである。しかし、本コントでは読書する主人公は少年である。ポーモン夫人は、女子ばかりでなく、男子も読書によって知識と徳を身につけ人生の成功者となれることをここで訴えている。また、登場人物である隊長は、実際に読書をするわけではないが教養のある人物に見せたいという虚栄心から書物を所有している。書物による権威付けは、書物が希少であった時代からあったと思われるが、それは王侯貴族たちに

許された特権であり庶民には縁がなかった。隊長が図書室を持っているというくだりは、書物の大量生産と普及の結果、庶民の間にも書物を所有する人々が増加したということを感じさせられる興味深い記述である。これについては次章で詳しく言及したい。

### 3.2 「不連続きの娘」Aurore et Aimée

本コントは、7番目のコントであり、第12対話（10日目）のなかで語られる。

オーロール（夜明けという意味）の母は、大金持ちであった。しかし母は突然全財産を失い、しかたなく町を離れて田舎に行く。オーロールも後から田舎に行く途中、森のなかで迷うが、羊飼いの女に助けられて一緒に暮らす。羊飼いはオーロールに少しばかりの羊の群れを預け、退屈しないように本を一冊持ってくるように言う（Prenez donc un livre）。しかし、オーロールは字が読めない。

「私、読書はあんまり好きじゃないんです。」オーロールは赤面しながら答えました。それとも、自分は字を読むことさえできない、ということを打ち明けるのが恥ずかしかったからです（C'est qu'elle était honteuse d'avouer la fée qu'elle ne savait même pas lire）。でも、やっぱり本当のことを打ち明ければなりませんでした。オーロールは、自分は小さいころ、どうしても字を読むお稽古をしたがらなかったし、今度は大きくなってみると、そのお稽古をする暇がなかったのだ、ということを話しました（elle n'avait jamais voulu apprendre à lire quand elle était petite, et qu'elle n'en avait pas eu le temps quand elle était devenue grande）<sup>(27)</sup>。

オーロールは、おしゃれや芝居見物やダンスパーティに忙しく、勉強する暇がなかったと言い、田舎での退屈な生活に対する不安を告げる。羊飼いは、今が勉学のよい機会であるから、一日を「お祈りと、読書と、仕事と、散歩の時間（la prière, la lecture, la travail, la promenade）」<sup>(28)</sup>に分けて、有効に過ごせば時間はすぐに過ぎて、退屈することなど決してないと諭す。

オーロールは、もう退屈を感じなくなったので、すっかり嬉しくなり、一生懸命になって読書や仕事に精を出しました。そして、田舎の仕事を夢中になってやっているほうが、町の生活よりも千倍も幸福に思いました（Aurore, charmée de ne plus sentir l'ennui, a'appliqua de tout son cœur à la lecture et au travail ; et elle se trouvait mille fois plus heureuse au milieu de ses occupations champêtres qu'à la ville）<sup>(29)</sup>。

その後、オーロールは森に狩りにやってきた王子と出会い結婚し、紆余曲折を経て、最後は王子とともに幸せになる。



このコトは、町の生活、すなわち華美で享樂的で虚栄心に満ちた欺瞞の生活と、田舎の生活、すなわち自然で勤勉で実直な人間らしい生活が対比的に描かれている。こうした対比はここだけではなく、「美女と野獣」やその他のコトにもよくみられる。羊飼いは、知恵があり主人公を励まし導く女性として描かれている。羊飼いは主人公に読書を勧め、主人公はそれによって目覚めさせられる。次のセリフは、町で享樂的な生活を送っていたオーロールが、読書や仕事を通して自分の生き方を変化させ、それまでの虚しい生活から脱却できたということを示唆している。「もし私が、あの森に放り出されなかったら、私は相変わらず何もわからないままだったでしょうし、私の心は虚栄心や、怠け癖や、遊びたい気持ちでいっぱい、意地悪で、不幸せな娘になっていたにちがいません。」<sup>(30)</sup>

### 3.3 「美しい娘と醜い娘」 Bellotte et Laideronnette

本コトは、13番目のコトであり、26対話（第24日目）のなかで語られる。

貴族には双生児の娘たちがいた。姉はペロネット（美しい娘という意味）、妹はレードゥロネット（醜い娘）といった。二人は家庭教師がつけられていたので12歳までよく勉強をしたが、社交界に出てからは着飾ることに夢中で勉強をしなくなる。社交界では美しい姉だけがもてはやされ、器量の悪い妹は無視される。人前に出たがらなくなった妹は、たまたま父親の図書室で一冊の本を手に取り、次の文面に出会う。一うわべの美しさは時がたてば衰える。えてして美女はもてはやされ遊び歩いて勉学を怠っているうちに、知恵も美しさもない女性になってしまう。勉学には適した時期があり、そのころに気がついても既に手遅れである。器量が悪くても、若いころから勉学をし内面の美しさを磨けば、年老いても知恵のある魅力的な女性でいられる（筆者による要約）一。妹は、まるで自分にあてて書かれたように思い、これを契機に読書に励む。

レードゥロネットは、ふたたび家庭教師を頼んで、一生懸命に読書に打ち込み、自身が読んだことをじっくりと考えてみたので、しばらくするととてもりっぱな少女になりました。(Elle redemande ses maîtres, s'applique à la lecture, fait de bonnes réflexions sur ce qu'elle lit, et en peu de temps devient une fille de mérite)<sup>(31)</sup>。

やがて姉は美しく若い青年貴族と、妹は若くはないが知恵のあるその家来と結婚する。姉はすぐに夫から飽きられ不平不満のなかで次第に美しさを失い、ついには離婚されてしまう。一方、妹は知性豊かな夫とともに互いを敬い信頼しあいながら幸せな生活を築いていく。そのことで、姉はますます自分の不幸感を強くする。妹は、絶望のなかにいる姉に自分がかつて読んだ本の一節を話した後、次のように励ます。

姉さんが自分の生涯のうちで一番大きな不幸と思っていることでも、姉さんの心掛け次第で一番の幸せにすることもできますわ。姉さんはまだ19歳。姉さんが町で遊び歩いていたら、確かに一生懸命勉強するにはもう時間が遅すぎるかもしれません。でも今姉さんが暮らしているこのような人里離れた田舎なら、知恵を身につける時間は十分にあります (cultiver votre esprit)。それを忘れないで、姉さん、とにかく読書をして、じっくりものを考えて知恵を身につけなければいけないわ (il faut l'orner par la lecture et les réflexions)<sup>(32)</sup>。

初めは、妹の助言に従うのは難しいと思ったベロネットも、学問をし思索を重ねるうちに、自分の不幸も客観視できるまでになる。彼女の「知識 (ses lumières) と、幅広い学問 (l'étendue de ses connaissances) と、優れた知性 (la supériorité de son esprit) と、心の優しさ (la bonté de son cœur)」<sup>(33)</sup> は夫を感銘させ、気粉れだった彼の心に真の愛情を呼び起こす。二人は以後幸せに暮らす。

外面の美醜より内面的な美しさが大事であり、それを見る知恵と心は読書によって養われるという教訓は、「美女と野獣」のテーマでもあった。本コトは、それをより強く示唆していると言える。

## 第4章 期待される読書像

ポーモン夫人が描いた読書の姿は2種類ある。一つは、当時の人々が望むような読書の理想の姿、もう一つは、それとは正反対の、読書に潜む好ましからざる側面である。

### 4.1 望ましい読書

コトのなかの読書の記述は、物語の導入部にみられ、後半にはほとんど見られない。ポーモン夫人は、物語の前提となる主人公の人物像のなかに読書を盛り込むことで、物語の後の展開に影響があることを暗示させているのである。物語の直接の展開には読書はほとんど姿を現さないが、幸せを掴む主人公が勤勉で読書好きであるということを読者は既に知らされている。しかし、ポーモン夫人は、コトを通して子どもたちに読書を勧める一方、どのような本を読むべきかという具体的な内容にはほとんど触れない。「二人の王子さま」のなかの偉人の伝記を除けば、bons livres (ためになる本、よい本) という漠然とした表現が見えるだけである。ポーモン夫人がコトに描く読書の姿は、実質的な内容を伴ったものではなく、子どもたちの知性や心性を養うための読書の理想形であって、あくまでも読書の効用や意義を訴える心的イメージなのである。読書のイメージはコトを読み進めていくなかで反復され増強されていき、知らず知らずに受容されることになる。それは、当時の人々 (子どもばかりでなく大人たちもである、本を選び購入するのは大人である) が

求めていた読書像を形作り、また牽引する役割を果たしたのではないだろうか。『子どもの雑誌』がその後の100年間に幾度も版を重ねられヨーロッパ中に流布されたという事実が、それを物語っているように思われる。『子どもの雑誌』が、どのような人々にどのように読まれたかを知ることは難しいが、僅かに残された当時の記録を通してその一片を知ることができる。

一つの例は、18世紀フランスの地方に住む平凡な商人の読書記録である。以下、ダントンの研究<sup>(34)</sup>からそのあらましを示す。裕福な織物商人ジャン・ランソン(J. Ranson, 1747-1823)は、フランス革命前の1774年から11年間に、知人の書籍商に59点の書物を注文した。ランソンの手紙には、書物の注文だけではなく読書の感想や家族の近況が詳しく記されており、当時における一庶民の読書の好みや読書習慣を窺うことができる。それによると、注文のなかで最も多いのは子ども向けの本と教育関係の本であり、全体の約3分の1を占めていた。それは、親となったランソンが子どもの教育に多大な関心を寄せるようになったためであると思われる。ランソンは、とりわけルソーに信奉していた。ポーモン夫人もランソンにとってお気に入りの作家の一人であり、購入リストには2点の著作、『子どもの雑誌』と『新しい道徳説話』<sup>(35)</sup>が含まれていた。ダントンは、これらの書物は子どもをただ楽しませるのではなく、本を通して子どもの道徳教育を行おうとするもので、持って生まれたよい性格を正しい教育によって伸ばすというルソーの前提を支えるものであった、と述べる<sup>(36)</sup>。

また別の例として、18世紀のドイツの上流市民階級に属した人物の自伝がある。1760年生まれのディンター(Gustav Dinter)は、領主裁判官である法律学者の家に生まれ、後にケーニヒスブルク大学の神学教授となった人物である。彼は自伝で子ども時代を次のように回想している。

私は、幼いころは、母の膝の上に、後には母のかたわらに座って、過ごしたものである。そうして、母にお話をしてもらったり、本を読んでもらったり、あるいは私が母に本を読んで聞かせたりした。(中略)絵本のなかの絵を母が説明してくれたり、あるいは家庭教師から何を習ったかと聞かれたり、また、ポーモン作のレディ・センサーやレディ・スピリシユアルなどという名前のお姫様が登場する本を読んで、それについて話し合ったりもした(下線は筆者)。このようにして、父によって実際、相当乱暴に育った少年は、柔和なところ、感激性のところもあわせ持つようになったのである。まさに、このような性質が、今なお私のためになっている<sup>(37)</sup>。

寺岡は、「道徳の規則は、物語を通して裏付けられないならば、分別に働きかけるだけで、想像力呼び起こすものにはならない」というバセドウ(Johann Bernhard Basedow, 1724-1790)の言葉をあげ、道徳や教訓が盛り込まれた物語が盛んに読まれるようになった背景には、教理問答の復唱や規則等の詰め込みではなく、子どもたちの成長に即して道徳を提示しようとする教育意識が当時の人々の間に広まっていたからであると述べる<sup>(38)</sup>。

## 4.2 望ましくない読書

ポーモン夫人は、当時読書の負の側面とみなされていた事象についても見逃さずに描いている。ふたたび「美しい娘と醜い娘」のコントを参照したい。このコントで興味深いのは、主人公の娘たちの家には父親の図書室と母親の図書室がそれぞれ別々に存在することである。このくだりを少し詳しく見てみよう。はじめ、レードゥロネットは退屈なので暇つぶしに小説を探しに母親の図書室に行くが、そこは施錠されている、父親の図書室にあるのはレードゥロネットが大嫌いな硬い本（livres sérieux）ばかりであるが、仕方がないので父親の図書室に行き、例の本に出会うという設定である。しかし、父親と母親がそれぞれに自分の図書室を持っていても、彼らが実際に読書する人かどうかは明かされていない。コントには父親は登場しないし、母親も次のように記されるのみである。「二人の母は愚かな女でした。というのは、二人にはまだまだ勉強することがたくさん残っているというのに、そんなことを考えないで、自分と一緒に二人の娘を社交界に連れていったのです（leur mère fit une sottise : car, sans penser qu'il leur restait encore bien des choses à apprendre, elle les mena avec elle dans les assemblées）。」<sup>(39)</sup>

この記述からは、知性を持った母親像を感じとることはできない。ポーモン夫人にとって、読書とは知識を学び心を養うものであるから、知性のないこの母親は自分の図書室があっても読書しない女性の例えなのだろうか。そうであるならば、「二人の王子さま」の隊長と同様、母親も書物を所有することで自分の威信を誇示する一人として描かれたことになる。個人の家の中に図書室が登場し始めるのは、18世紀のことと言われている。シャルチエは、18世紀のパリで、個人の家の中に図書室が用意された理由を以下の通りあげている。第1は、書物収集熱のため、第2は、社会的な体面を保つため、第3は、知的生産の場（作家、弁護士、学者などが図書室を仕事場として使用）にするためである<sup>(40)</sup>。社会的体面のために図書室をつくるという行為は、書物をただ所有するだけで地位やある種の知的な豊かさを誇示しようとする人々が出現したこと、書物の所有がそれだけ人々の間に広まったことを示すものである。

マンガエルは、18世紀の帝政ロシアにあって、紙くずを詰め込んで製本した「書物」を大量に売って財をなした人物がおり、貴族たちはこの「書物」で偽の図書室をつくっては、書物好きのエカテリーナ2世の寵愛を得ようとしたと述べ、「書物が部屋にあれば、その部屋を訪れる者はそこに何らかの知性を感じ、また書物がなければ知性の欠如を感じる、書物はそうした象徴性の点でも重要な役割を果たしている」<sup>(41)</sup>と指摘する。ポーモン夫人は、実際に読むこともせず書物の象徴性だけに頼ろうとする人々の出現を、批判的に眺め揶揄しているように見える。

また見方を変えると、「美しい娘と醜い娘」の母親は前者とは異なる種類の人々の例としても解釈できる。母親の図書室には小説があることから、母親は小説を読む女性として描かれたのかもしれない。そうであるなら、小説を読むことが必ずしも知性を磨くことにはならないという警告とも受け取れる。18世紀のフランスでは小説が大流行となり、その中心的な読者層は女性であった。娯楽

的な読書が広がりを見せるなかで、読書は常に無条件によいものではなくなった。18世紀後半から19世紀初めにかけて、読書には、よき教育の中心的な構成要素という肯定的評価と、日常生活からの逃避やふしだらな空想を呼び起こす麻薬剤という否定的評価の、全く相反する見方がおこった。「若い娘や女性たちは、往々にして憂慮すべき読書習慣によって危険にさらされていると思われた。とりわけ彼女らは、例えば小説を読み耽って自分の子どもたちの世話をなおざりにする母親のような読書中毒に感染しやすいと見られていた。」<sup>(42)</sup> ボーモン夫人のコントのなかから滲み出る小説読者に対する批判的見方は、こうした時代の読書観をまさに反映するものと言えよう。

## 終章

ボーモン夫人が作家として活躍した時代の18世紀ヨーロッパでは、読書文化の大きな変革期であった。18世紀には子どもたち読者層を対象とする児童文学が隆盛し、読書はもはや特権階級に属する限られた人々のものではなく、庶民のものになった。ボーモン夫人は子どもたちに向けて創った教訓的物語のなかに、単純だが強力な読書啓発のメッセージを込めた。「美女と野獣」はその代表例である。一方で、彼女は、当時新たな問題となりつつあった小説読者や、書物を自分の体面保持に利用するだけの人々を批判的に描くことを忘れなかった。そうすることで、危険な読書から子どもたちを遠ざけ、理想の読書へと導こうとしたものと推察できる。ボーモン夫人の作品は、たちまちヨーロッパ中に広く流布した。ボーモン夫人の示す読書の理想形は、当時の人々が思い描く理想形でもあったのだろう。

ボーモン夫人の初版から250年、読書は広く浸透した。「美女と野獣」の物語の骨格は引き継がれても、そこに込められるメッセージはそれぞれの時代の文化的状況を反映しながら変化していくものである。20世紀後半のディズニーのミュージカル映画では、冒頭部分で、ベルは読書好きな娘として登場する。興味深いのは、読書に関する扱いである。ボーモン夫人の「美女と野獣」では読書が決定的な役割を担っていたのに対して、ディズニー版では、ベルは読書好きな娘として設定されてはいても、それは物語の展開にほとんど影響を及ぼしていない。

ディズニー版では、ベルの住む村には小さな貸本屋らしきものがある。ベルは、その店から既読の本まで借りて読むほどの読書好きである。しかし、周囲の人々は、そうした読書好きのベルを変わり者として見ている。それどころか、読書を自分の殻に閉じこもる危険性を持つ趣味として捉え、また、知識を身につけた女性は必ずしも歓迎されないという否定的な考えも持っている。一方、ベルのほうも18世紀に描かれたベルとはやや異なる。ベルのセリフに「本は想像力がわく」とあるが、その内容は「素敵な王子さまが現れる」「夢の世界」を想像するというものである。つまり、ディズニー版におけるベルの読書は、ボーモン夫人の言う「りっぱな人」になるためのものでも、人生に「役にたつ」ためのものでもない。教育と読書に対する熱望が急速に高まりつつあった時代、ボー

モン夫人の「美女と野獣」は読書の重要性を子どもたちに力強く訴えるものであった。しかし、この物語に託された読書の意義を伝える役目は、今ではすっかり消滅してしまったと言える。

筆者は、ディズニー版映画を初めて観た際、物語の展開に僅かながら不自然さを感じた。その後、何度かミュージカルの舞台を楽しむ機会があったが、最初にしたものと同様の違和感が常に残った。この違和感は、ポーモン夫人の時代における読書の意義が、現代の〈美女と野獣〉では既に大きく剥落したにもかかわらず、原作中の読書の形だけが物語の冒頭にとり残されてしまったことに因るものと思われる。それはまた、かつて貴族の子息令嬢にのみ許される教育の糧であり、高尚で上品な趣味の一つであった読書が、現代の社会においては誰もが気軽に楽しめるほどに普及し一般化し多様化したということの一つの証でもあろう。

本稿では、「美女と野獣」のなかで、知性を磨き人間性を養う前提として位置づけられていた読書の、その後の様子について言及するには至らなかった。この点に関しては、また稿を改めて論ずることとしたい。

#### 注・引用

- (1) 「美女と野獣」は、ポーモン夫人の代表作として知られるが他の著者による同名の作品も多い。また、表現の様式や形態も多様である。本稿では、ポーモン夫人の著作についてはポーモン版、あるいは鉤括弧で「美女と野獣」と表し、他の同名の作品は著者名等の後に「版」を付した形、例えば「ヴィルヌーヴ版」などと表す。また、一般に知られている美女と野獣の物語を総称的にさす場合は、山括弧を用いて〈美女と野獣〉と表す。
- (2) 初版の出版年は以下の文献を参照した。
  - ① Biancardi, Élisabeth, *La Jeune Américaine et les contes marins (La Belle et la Bête); Les Belles solitaires. Magasin des enfants (La Belle et la Bête) Madame de Villeneuve. Madame Leprince de Beaumont.* édition critique établie par Élisabeth Biancardi. (Bibliothèque des génies et des fées; 15) Paris, H. Champion, 2008, 1634p.
  - ② Hearne, Betsy., *Beauty and the beast: visions and revisions of an old tale.* Chicago, University of Chicago Press, 1989. 247p. ベッツィ・ハーン『美女と野獣：テキストとイメージの変遷』田中京子訳新曜社, 1995. 446p.古い文献では初版の出版年は1757年、近年の文献では1756年とある。ビアンカルディは、エジンバラの国立スコットランド図書館の所蔵図書により (p. 965)、ハーンはオハイオ州マイアミ大学図書館の所蔵図書により (p. 63)、これを確認した。また、筆者は大英図書館蔵書目録の書誌記述により確認した。http://catalogue.bl.uk 〈2013.11.4 確認〉
- (3) *Magasin des enfants, ou dialogues entre une sage gouvernante et plusieurs de ses élèves de la première distinction.* Londres, J. Habercorn, 1756. 4t.
- (4) *Contes marines ou la Jeune Américaine.* La Hayne, Aux dépens de la Campanie, 1740-41.
- (5) 子どもの定義は種々あるが、『子どもの雑誌』の登場人物が5歳から13歳までの貴族の娘であることから、本稿では現在の日本における小学生程度の年齢層をさして「子ども」と呼ぶ。
- (6) 前掲書(2)②, p. 68
- (7) 前掲書(2)②, p. 19
- (8) <https://ndlopac.ndl.go.jp> 〈2013.11.20 確認〉
- (9) ポーモン夫人の略歴では、ビアンカルディの前掲書(2)①、および以下の文献を参考にした。文献

間で差異がある場合は、出版年の新しいビアンカルディのものに依拠した。

- ①『美女と野獣』鈴木豊訳 改定版 角川書店 1992 274p. 底本: Leprince de Beaumont, Madame (Jeanne-Marie), *Magasin des enfants, ou, Dialogues: entre une sage gouvernante, & plusieurs de ses élèves de la première distinction*. Nouvelle éd. et revue par Ortaire Fournier, Paris, J. Vermot, Librairie Editeur. [n. d.]
- ②私市保彦『フランスの子どもの本:「眠りの森の美女」から「星の王子さま」へ』白水社 2001 287p.
- ③ Grenz, Dagmar., *Mädchenliteratur: von der moralisch-belehrenden Schriften im 18. Jahrhundert bis zur Herausbildung der Backfischliteratur im 19. Jahrhundert*. Stuttgart, J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1981, 282p. (ダグマル・グレンツ『少女文学: 18世紀の道徳的・教訓的読み物から19世紀における「小娘文学」の成立まで』中村元保・渡邊洋子訳 同学社 2004 420p.)
- (10) *Le Nouveau Magasin françois, ou Bibliothèque instructive et amusante*. Londres, François Changuion, 1750.
- (11) *Magasin des adolescentes, ou Dialogues d'une sage gouvernante avec ses élèves de la première distinction*, Londres, J. Nourse, 1760. 4t
- (12) Hazard, Paul., *Les Livres, les enfants et les hommes*. Paris, Flammarion, 1931. (ポール・アザール『本・子ども・大人』矢崎源九郎・横山正矢 [共] 訳 [再版] 紀伊国屋書店 1957 270p. 引用は p. 59)
- (13) 同掲書, p. 18
- (14) 前掲書(2)①, p. 935
- (15) 文芸作品の一ジャンル。広辞苑では「軽妙で機知に富んだ短い物語」とある。本稿では『子どもの雑誌』のなかのお話をさす場合には「コント」と呼び、それ以外は「物語」と使い分けて区別する。コントの数は当初は13であったが、版によってその数も異なる場合がある。
- (16) 『子どもの雑誌』は27日に分かれているが対話数は全部で29、つまり27日間で29回の対話が行われ、「美女と野獣」は3日目にあたる第5回対話時のコントとなる。
- (17) 原文はビアンカルディの前掲書(2)①から引用した。翻訳は鈴木の前掲書(9)①を参照した。ただし、鈴木訳の底本は19世紀の版であり1756年版のテキストとは異なる箇所がある。そのため、引用の翻訳と鈴木訳では内容そのものが異なる場合がある。また下線はすべて筆者による。
- (18) 前掲書(2)①, p. 1018
- (19) 前掲書(2)①, p. 1019
- (20) 原文では *une grande bibliothèque* であり、鈴木もまた他の翻訳書でも「大きな書棚」と訳している。「ベルの館」は原文では *Appartement de la Belle* である。鈴木訳は「ベルの屋敷」、他の翻訳書では「ベルの部屋」となっている。*Appartement* は、複数の部屋からなる独立した居住空間の意味を持つ。筆者は、ベルが城全体の主として迎えられたという意味あいも込め、「ベルの館」に「図書室」があるというイメージで訳した。他のコントでは、鈴木は *bibliothèque* を「図書室」と訳している。いずれの場合でも、多くの書物があるという状況を示す意味では同じであり、前後の文脈から適宜「図書室」、「書齋」、「書棚」の訳語を使用する。
- (21) 前掲書(2)①, p. 1024
- (22) 前掲書(2)①, p. 1030
- (23) 前掲書(2)②, pp. 15-16
- (24) 前掲書(2)①, p. 1040
- (25) 前掲書(2)①, p. 1041
- (26) 前掲書(2)①, pp. 1043-44
- (27) 前掲書(2)①, p. 1134
- (28) 前掲書(2)①, p. 1131

- (29) 前掲書(2)①, p. 1132
- (30) 前掲書(2)①, p. 1132
- (31) 前掲書(2)①, p. 1334
- (32) 前掲書(2)①, p. 1335
- (33) 前掲書(2)①, p. 1337
- (34) 同テーマに関するダーントンの研究を収録する図書は次の2点があり、双方を参照した。  
 ① Darnton, Robert., *The great cat massacre and other episodes in French cultural history*. New York, Basic Books, 1984. (ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』海保真夫・鷺見洋一共訳 岩波書店 1986 382p.)  
 ② Chartier, Roger., *Pratique de la lecture*. Paris, Editions Rivages, 1985. (R・シャルチエ編『書物から読書へ』水林章〔他〕訳 みすず書房 1992 374p.) 当該論文：ロバート・ダーントン「ルソーを読む—18世紀の『平均的』読者像」(pp. 195-246)
- (35) *Nouveaux contes moraux*. Lyon, Pierre Bruyset-Ponthus, 1776. 2t
- (36) 前掲書(34)①, pp. 310-311
- (37) Hardach-Pinke, Irene & Hardach, Gerd (Hrsg.), *Deutsche Kindheiten: autobiographische Zeugnisse, 1700-1900*. Kronberg, Athenäum-Verlag, 1978. 370p. (イレーネ・ハルダッハ＝ピンケ&ゲルト・ハルダッハ『ドイツ/子どもの社会史：1700-1900年の自伝による証言』木村育世・姫岡とし子他訳 勁草書房 1992 544p. 引用は p. 217)
- (38) 寺岡聖豪「18世紀の児童文学と読書する子ども：J.H.カンペの『ロビンソン2世』を手がかりにして」『福岡教育大学紀要 第四分冊 教職科編』第45号 1996 pp. 87-95
- (39) 前掲書(2)①, p. 1332
- (40) Chartier, Roger., *Lectures et lecteurs dans la France D'Ancien Régime*. Paris, Editions du Seuil, 1987 (3, 5 et 7. Promodis, 1982 et 1984), 464p. (ロジェ・シャルチエ『読書と読者：アンシャン・レジーム期フランスにおける』長谷川輝夫・宮下志朗〔共〕訳 みすず書房 464p. 引用は pp. 195-198)
- (41) Manguel, Alberto., *A history of reading*. London, Harper Collins, 1996. 372p. (アルベルト・マンガエル『読書の歴史：あるいは読者の歴史』原田範行訳 東京 柏書房 1999 354p. 引用は pp. 237-238)
- (42) 田村俊作編『文読む姿の西東 - 描かれた読書と書物史』慶應義塾大学出版会 2007 218p. 引用は p. 184

#### 参考文献

1. Febvre, Lucien & Martin, Henri-Jean., *L'apparition du livre*. 2. ed. Paris, Albin Michel, 1971 (ルシアン・フェーヴル & アンリ＝ジャン・マルタン『書物の出現』関根素子〔他〕訳 筑摩書房 1998 2v.)
2. 香内三郎『「読者」の誕生：活字文化はどのようにして定着したか』晶文社 2004 534p.
3. Cavallo, Guglielmo & Chartier, Roger., *Histoire de la lecture dans le monde occidental*. Rome & Bari, Gius. Laterza & Figli Spa, 1995. (ロジェ・シャルチエ&グリエルモ・カヴァッロ『読むことの歴史：ヨーロッパ読書史』田村毅〔他〕訳 大修館書店 2000 634p.)
4. 宮下志朗『本を読むデモクラシー：“読者大衆”の出現』刀水書房 2008 151p.



The View of Reading of the 18th Century in “Beauty and the Beast” :  
Through the Original Text of Madame Leprince de Beaumont

Akiko WAKAMATSU

Abstract

---

The purpose of this study is to explore the contours of the view of reading of 18th century France through a reading of Madame Beaumont's original “Beauty and the Beast”. The conclusion of this paper is that, in didactic stories made for children, Madame Beaumont included a simple but strong message of enlightenment through reading. “Beauty and the Beast” is a typical example of her writing. However, she satirized people who used books for only superficial dignity and readers of novels whose reading habits could be harmful. These examples illustrate that Madame Beaumont's intention was to show an ideal form of reading to children. It is also inferred that her ideal of reading represented and proclaimed a new way of reading for her contemporaries who had been seeking a new way of education.

---

**Key words;** Madame Leprince de Beaumont, Beauty and the Beast, La Belle et la Bête, *Magasin des enfants*, reading